特別
読み切り

「日本少年」は「今治少年重見周吉」

奥村 紀子

重見周吉の肖像。
エール大学 所蔵資料から恒松氏発見。

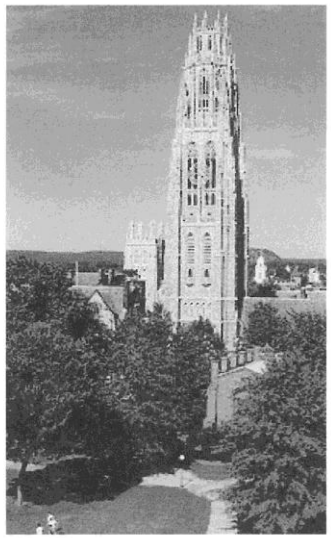
学習院同窓会「輔仁会雑誌」
重見の投稿が掲載されている四号のうちの一つ

重見周吉著「日本少年」は一八八九年アメリカで出版され、約百年を経て英国ロンドンの古書市場で発掘された。ロンドン漱石記念館長で古書店経営者でもある恒松郁生氏は、「日本少年」の著者がかつて若き日の漱石と英語教師の座を争った人物であることをつきとめた。しかもその重見なる人物が愛媛県今治の出身であるとわかったのだ。私は漱石研究がきっかけで記念館と十年来交流がある関係上、館長から翻訳を薦められた際、私は今治で幼少女期を過ごした自分の経験が翻訳に追い風となるならと期待し、取り組むことにした。

「日本少年」再発見には、夏目漱石との絡みがなければ起こりえなかった経緯がある。当時二十四歳、文科大学（東京大学）を卒業しこれから社会に乗り出そうとする作家以前の夏目金之助が、就職を希望して学習院大学の教職に応募した際、ライバルとなったのが重見周吉であった。その時点では語学力・言語運用能力において長期留学経験を持つ重見の方が夏目金之助より優っていたのかもしれない。四半世紀後、作家として揺るがぬ地位を確立した夏目漱石は四十七歳のとき、学習院同窓会である輔仁会において「私の個人主義」と題する講演を行い、その導入部分で重見に言及した。

”何でも米国帰りの人とか聞いてゐました。それで、もし其時にその米国帰りの人が採用されずに、この私がまぐれ当りに学習院の教師になって、しかも今日迄永続していたなら、…“

二十五年後自らの人生の足跡を振り返ると同時にこれから社会へ漕ぎ出そうとする若者のためにあえてこのエピソードを持ち出した漱石の意図を考えると、講演ではつとめて軽く言い流しているものの、学習院をめぐる争いは作家漱石を生み出す重大な契機になったと考えられる。つまり、学習院の挫折がなければその後の松山―熊本―ロンドン―東京という移動の軌跡は描かれなかっただろう。漱石の執筆活動が本格稼動し始めたのは東京へ戻ってから



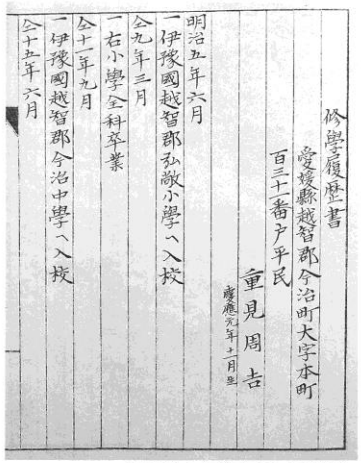
エール大学

1889年日本人により英文で著され
米国で出版された「日本少年」

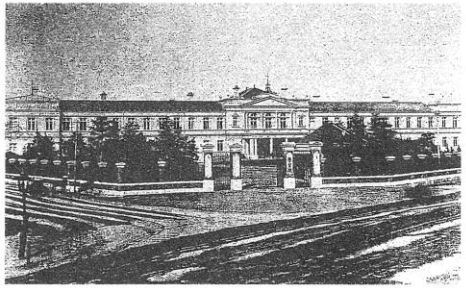
のことだった。学習院不採用後の地方体験と留学体験が後の創作衝動を具体化させたのは作品群をみても明らかだ。

では、重見周吉はどういう人物だったのだろう。彼は漱石に三年先立つ慶応元年（一八六五）現在の今治市本町にある商家で八人兄弟姉妹の五番目に生まれた。十四歳で京都同志社に進学してキリスト教に受洗し、十九歳で米国留学、エール大学理学部を卒業すると直ちに医学部へ進学した。「日本少年」はこの時、留学を継続し、医学を修める学費稼ぎのためにコネチカット州ニューヘヴンで執筆された自伝的エッセーである。本の売れ行きは好調で、ニューヨークの別の出版社から第二版が出版されるなどして学費を得た重見は、エール大学を修了と同時に医師免許を取得して帰国した。帰国後は東京に居を移し、直ちに慈恵医学校と、そして学習院大学に採用され英語教師を務めた。一方では日本橋に重見医院を開業しており、慈恵と学習院の教職が満了するとそのまま医師として東京で生涯を全うした。没後は、関東大震災を教訓に横に寝かせた形のキリスト教式の墓が青山墓地に作られたことまでわかっている。

そして「日本少年」は、私を故郷と再会させてくれるものだった。読み進むうちに自分も今治に住み生活していた記憶が蘇ってくる。留学中重見が遠く北米の大学町から記憶のみを頼りに故郷今治に想いを馳せながら綴ったエッセーだが、一世紀以上前の文化や慣習がそのまま現在に息づいている描写もあり民俗学的資料としての意味も見出される。故郷を離れず住み暮らすと、そこにある文化風土は空気のように当たり前で、それがどんなに素晴らしいか意識しなくなりがちだ。学費調達が直接の執筆動機だったにせよ、重見は今治に限定して町と人を描写することにより、結果的に日本国一般の人と生活を外国人に紹介することになったわけである。グローバル化が謳われている昨今だが、重見は一世紀以上前、既にそれに必要な異文化理解の一翼を担う重要な架け橋の役割を出版という形で果たしたのだ。しかも日本が明治維新で欧化政策に余念がない時代、中央でない地方の庶民生活を気負いなく描写した、当時二十四歳の重見周吉の語りに対し好感と共に一つの価値を認めることができる。


修學履歷書
愛媛縣越智郡今治町大字本町
百三十番戸平民
重見周吉
慶應元年十一月生
明治五年六月
一伊豫國越智郡弘敬小學ヘ入校
仝九年三月
一右小學全科卒業
仝十一年九月
一伊豫國越智郡今治中學ヘ入校
仝十五年六月

重見周吉の修学履歴書、冒頭部分。



重見の学習院奉職期間が明治26年～38年であることから、この四谷の校舎に勤務したものと考えられる。

ところで「日本少年」出版の十年後、やはり北米で出版され日本に逆輸入された日本人による英文著書に、新渡戸稲造の「武士道」がある。こちらは日本人固有の精神性が外国人のそれとどう異なるか解明するため、その足掛かりとして武士という言葉をキーワードにしたところ、それが内外の人に受けた。ただ当時日露戦争に伴う国民国家称揚のため時勢に便乗し利用されてしまった感が強く、新渡戸自身それを認めるとともに憂えている。

「武士道」と対照すれば全く別のスタンスで、今治を発信源として日本の暮らしと日本の子供を語ったのが「日本少年」だ。演繹すると、今治の町は日本の町であり、今治の少年は日本の少年としてアメリカ人に紹介されたのだ。

そして重見周吉には次の二つの意義が浮かび上がってきた。一つは、歴史の偶然により学習院教職の座を巡って、後の文豪夏目漱石とニアミスをすることになり、漱石の人生の方向性に負荷を加えたこと。もう一つは、百年前、向学心と希望を失わず、努力して習得した堪能な英語を駆使して、独自の日本紹介をなし、国家・政治レベルはさておき市民レベルの異文化理解に貢献したことだ。

しかも明治初期の今治という特殊な時代性と土地柄が重見を押し出す必要条件となっている。殖産興業に連動し、キリスト教精神が同志社創立当時の面々により四国で初めて今治に根づき、今治商人の心を捉えたこと、布教活動と合わせて行った英語教育が人々の旺盛な知的好奇心と異文化に対するあこがれを助長したのだろう。

「日本少年」は一少年の視線から見た日常の情景である。が、現代に十九世紀末の「日本少年」が投げかけているのは、モノには恵まれているが社会的成長低迷期にあって子供らしい希望や夢を見出しにくい状況にある今の日本少年少女に気づいて欲しい、〝志を抱く〟こと。向学心冷めやらず四国を出、日本という島国を出、大洋を越えて単身異郷に乗り込み、自分なりの志を全うした重見周吉という人物が百年以上前に存在したという事実である。

おくむら・のりこ（旧姓菅） 松山市出身。今治西高を経て関西学院大学文学部卒業。南海放送入社、一年後退社。同時通訳を学びながら英語・日本語講師、学会ボランティア等。愛媛大学法文学部法文学研究科第一期修士号取得。㈲クラパムコモンカンパニー設立。県生涯学習推進講師、産業振興財団ビジネスサポートアドバイザー、県美術館協議会委員。趣味は絵画、宵酔倶楽部。